氏名（本籍）	石田圭子（神奈川県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第232号
学位授与年月日	平成20年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉現実の神話化－ファシスト・モダニズムの理論
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　准教授（美術学部）　井村　彰
（論文第1副査）	〃　教授（〃）　松尾　大
（副査）	〃　准教授（〃）　越川倫明
（〃）	〃　教授（音楽学部）　畑　瞬一郎
（〃）	東京工芸大学　〃（芸術学部）　平山敬二

（論文内容の要旨）

アドルノはモダニズムの本質を「非同一的なもの」への探求とし、それをファシズム的全体性への抵抗力とした。しかしながら、とりわけファシズム運動の初期、看過しえない数の芸術家がその運動に魅了されたことは否定できない事実である。そこにはアドルノが理解したモダニズムと性質を異にするモダニズムの領域－ファシスト・モダニズム－が認められなければならないのではないだろうか。拙論の目的は、そうしたファシスト・モダニズムの特質について論じ、そこに内在するファシズムとの関連性を指摘することである。拙論が明らかにしようと努めるのはファシスト・モダニズムが大戦期の思潮の動向と強く結びついて現れたモダニズムの内部変化であり、それが「神話」－主観的に築かれる首尾一貫した虚構の世界観－の形成としてモダニズムの内に特殊な位置を占め、その特徴においてファシズムのイデオロギーと通じる側面を有していたということである。

第一章では、まず、本論文が扱うファシズムという概念の射程を明確にし、ラクー・ラバルト／ナンシー、アーレントを始めとするファシズム論を参照するとともにファシズムの実際を顧みて、その運動の本質を「神話」を形成する思考に認め、さらに、それが近代に対する危機意識として19世紀末頃から20世紀初頭のヨーロッパに現れた反合理主義的な精神的潮流、いわゆる「生の哲学」の諸潮流と密接に関わることを論じる。当時の危機感を反映するそうした思潮には、生の哲学の本来有する創造的契機と相対主義的な基盤が見失われ、ロマン的・反合理主義的直観に基づく世界観が絶対的なものとして訴えられる傾向がみられた。本章の後半では生の哲学の受容にみられる神話的思考のあり方およびファシズムとの関連性、さらには神話的思考が一般化した状況を確認する。

第二章では、第三章で論じられるファシスト・モダニズムの位置とその性質を明確にするため、モダニズム一般の性質について論じる。はじめにモダニズムの概念と外延を明確にし、その上でその運動の特徴について次のように論じる。モダニズムの特徴は統合と分裂、断片性と全体性という両極性にあると考えられるが、われわれはそのことを諸モダニズム論およびボードレール、セザンヌの具体例、アドルノの美学理論に拠って示す。そのモデルは最終的に、主観による全体性の追求が自ずと矛盾や断片性を露にしていくというアドルノの「否定弁証法」に見出される。モダニズムの芸術主体は「経験」の十全な認識に到達しようとして、主観の力を極限にまで高め、それに没入する。しかし、その営みはかえって、言い表しえないもの、概念から零れ落ちるもの、異質的他者、すなわち「非同一的なもの」を露呈させ、結果、それが一方で意図する全体性の把握を挫折させる。そこでは主観が陥るドグマティックなものの見方が批判され解体されるとともに、普遍的な客観性の認識は留保され、真理は確固たる不変

のものとしてではなく、浮遊する、毀れやすいものとして意識されることになる。われわれはそうした様態において把握されるモダニズムを「非同一的モダニズム」と呼ぶ。そこでは主観による同一化、全体化は達成されえず、結果的に「図像化禁止」の掟にしたがうものとなる。したがって、そこに神話は形成されず、非同一的モダニズムは「神話を批判する神話」として原理的にファシズムに背馳することになる。

第三章では、以上のように理解される非同一的モダニズムを逸脱する傾向としてファシスト・モダニズムを論じる。ここでは、ファシスト・モダニズムが第一章で論じた生の哲学の潮流と深く関わるものであり、神話化していく傾向が著しくみられたそれと同様、主観的世界観を客観的真実と同一のものとする神話形成が認められ、そこから同じくファシズムに取り込まれていったということを説明する。そうしたファシスト･モダニズムの理論を構想するにあたり､本論はルカーチのモダニズム批判を参照し、それを批判的に考察した。ルカーチは、表現主義と「客観的観念論」「〈世界観〉への転回」によって特徴づけられる思潮との連関を指摘し、それらがともに「本質」の訴えのもと主観的な「世界観」を真実とし、それによって客観的現実を捨象して現実の矛盾を覆い隠す弁護論になっていると論じて、それらを前ファシズム・イデオロギーと位置づけた。社会主義リアリズムに基づくルカーチの見解は実質的に方法論上の決定論であり、表現主義内部の分節を許さない教条主義的なものに陥っている。しかしながら､「現実の神話化」という観点からその批判の範囲が厳密に限界づけられるならば、彼の批判には妥当性が認められるものと思われ、また、ファシスト・モダニズムの理論として一般化しうるものでもあると考えられる。われわれはルカーチの問題意識と「芸術のための芸術（ラール・プール・ラール）」にファシズムと芸術の接点を見出したベンヤミンの問題意識のあいだにみられる共通性を指摘し、さらにはベンヤミンがファシズムとの内的関連を示唆するマリネッティ、ゲオルゲの事例もまた、同様の神話化の観点から理解されうるということからそのことを説明づけたいと思う。さらに、ゴットフリート・ベン、エズラ・パウンドの場合を検討し、同じく彼らに神話形成的思考が認められること、それによって彼らがファシズムに絡めとられていったことを明らかにする。

以上の検討から、われわれはファシスト・モダニズムについて次のような主張を導く。ファシスト・モダニズムは危機的時代において非同一的モダニズムの分裂を乗り越え、主観的な世界観によって現実を神話化する。このような非同一的モダニズムからファシスト・モダニズムへの推移は、大戦期の危機的状況という背景のもとに理解されるものである。それは精神的な相対主義の克服によって時代の危機を乗り越えようとした原（プロト）ファシズム的思潮の中に根を下ろすものであり、その世界観によってファシズムへと流れ込んでいったのである。